

コミュニケーション・コード間の 相互作用から見た談話分析*

近 藤 富 英

0. はじめに

言語を人間及び場面・状況と一緒に捉えようとするのは言語社会学の基本的立場であるが、それは人間がコミュニケーションする際に使われる手段であり、人間や場面・状況より離れて存在できるものではないという認識によっている。さらに言語に付随するパラランゲージ (paralanguage=類似言語) と身体の動きであるカイネシックス (kinesics=身振り) を相互に関連づけて使っていることもいろいろな研究で明らかにされてきている⁽¹⁾。そして人間の発話行動には、さまざまな言語変種が生じることも観察されている。どんな変種が考えられ、またその理由を心的距離という概念を用いながら、パラランゲージとカイネシックスの相互関係の中で、英語の会話を基に分析してみようというのが本小論の目的である。

1. 基本的概念と従来の研究

ここでは、心的距離 (communicative distance, 以下CD と略) と言語に付随するパラランゲージ、カイネシックスについて簡単に述べてみたい。

1.1. CD について

言語行動には、その言葉の使い方に対して、性差や年齢、社会的地位、親疎度による大まかな枠組みや社会的制約が存在するものである (今までの言語社会学は主にそういったものの研究に力を注いできた) が、人間の言語行動を注意して観察すると、短時間のインタラクティブな会話の中にも、それらで説明のつかないさまざまな変種が使われているのに気づくことがある。たとえば、同じ人が同じ相手と話していても、ある時は「です/ます体」を使い次の瞬間には使わなかったり⁽²⁾、あるいはニックネームで呼んでいたのに、「さんづけ」で呼ぶことがある。今までこれらの多くは自由変異 (free variation) という名目で片付けられることが多かったが、CD とは、これらの言語変種を説明するためにペン (Peng, 1974, 1975) によって提起された概念である。つまり人間には CD という、外来的条件に左右されない心理的距離が存在し、それが伸びたり縮んだりして言語行動に反映されると考えたのである。また逆に、ある言語変種⁽³⁾を用いることにより、ある特定の心理的距離を示すこともできる。それらは意識的に行なわれることもあるし、また半無意識的な場合も多い。

1.2. パラランゲージとカイネシックス

言語はコミュニケーションの主な手段であるが、前述したようにコミュニケーションは言語のみに限られない。このことは、ジョージ・トレーガー (George L. Trager) をはじめ彼の同僚であるヘンリー・リー・スミス・ジュニア (Henry Lee Smith, Jr.), ノーマン・マッコーン (Norman A. McQuown), レイ・バードウィステル (Ray L. Birdwhistell) らによって明らかにされた。特にトレーガーは、その先駆者的存在であり、彼の論文、*Paralanguage: A First Approximation* の中で次のように述べている。

For many years linguists and other students of language and of communication as a whole have been aware that communication is more than language. (1958: 1)

There it was pointed out that language was accompanied by other communication systems, one of motion--kinesics, and one of extralinguistic noises--vocalizations. (1958: 2)

トレーガーは特にパラランゲージについて詳細な体系的分類をし、音声活動を音質背景⁽⁴⁾ (voice set), 音性 (voice qualities), 発声ぶり (vocalization) の3つに分けている。音質背景とはパラランゲージではなく、パラランゲージが判断される基準となる個人の生理的、物理的特性のことであり、電話などで相手の性別や年齢が想像できるのはこれによる。音性は声の高低、速さなど、実際の音声活動に関係するが、発話から離して研究することができる。発声ぶりは実際に発っている時の音そのものであり、さらに次の3つに分けられる。

- (1) voice characteristics: 笑い, 泣き声など
- (2) vocal qualifiers: 強弱, 高低, 長さなど
- (3) vocal segregates: uh-uh, uh-huh, hiss など独立した音

トレーガーによりパラランゲージについては多くのことが明らかにされたが、必要性に気づいてはいたものの、その持つ役割や機能については触れていない。この小論では、トレーガーの用いた略号を一部使用しながら、言語変種との相互作用の中で、その役割についても考察するつもりである。

パラランゲージの研究と同じ頃、カイネシックスの研究も興味は持たれていたらしく、トレーガーは次のように述べている。

The theoretical description of the field (of kinesics) has gone along with that of paralanguage, and it appears that in their overall structure these two fields of human behavior may be largely analogous to each other, as contrasted with language. (1958: 7-8)

すなわち、トレーガーはパラランゲージとカイネシックスは言語に対する関係において互いに類似していると推測している。

その後、カイネシックスは、その記述上の問題はあったが、具体的であるということも手伝って、パラランゲージよりもかなりその研究が進化した。ここでは、ポール・エックマン (Paul Ekman) の分類 (1979) を参考にした。エックマンは、カイネシックスをそれが果たす役割と性質により、次の3つに大きく分類している。

- (1) エンブレム (Emblems=表象)⁽⁵⁾: 文化的に定められた身振りで、はっきりとした意味を持ち、言語から独立して使用されても意味が通じるもの。

- (2) ボディ・マニピュレーター (Body Manipulators=操縦)：身体のある部分で他の身体の部分や他の物体に触れる無意識的動作で、動作している人の癖や心理状態と関係が深い⁽⁶⁾。
- (3) イラストレーター (Illustrators=図解)：話している言葉を追加説明する時に使われ、通常、言語に付随しているもの。

パン (1979) は、言語、パラランゲージ、カイネックスをそれぞれシステムと見なし、そのシステム間の相互作用をインターシステムの機能と名付けたが、ここでもそれらの相互作用に注目していくことにする。

2. データベースの作製と分析方法

2.1. データの背景

主なデータは『NHKテレビ英語会話』のインタビュー番組⁽⁷⁾であり、その他映画なども少し参考にした。インタビュー番組では、司会を務める小松達也が日系二世のビジネスマンである Dick Yamashita に日米貿易摩擦についてインタビューしているものである。両者とも50代半ば程の男性で、打ち合わせはあったはずであるが、フォーマルな話しぶりや内容から初対面に近い関係のように思われた。番組の長さは30分番組であるが、正味25分程である。この種の分析のためには、自然な英語の発話行動を観察するのが理想であるが、後の分析のためにはビデオ録画をしなければならないであろう。そうするとインフォーマントを探すことも難しく、たとえ見つかってもカメラを意識してかえって不自然になる恐れがある。またカメラの存在を知られずに撮ることも状況的に不可能である。そこでそれに近い二次的形ということで、テレビのインタビュー番組を利用することにした。2人はやや湾曲したテーブルに横に並んで位置しているが、相手を見る時K (小松) は左に、Y (Yamashita) は右にそれぞれ顔や身体を向けなければならない。出演者は2人だけであるが、このほかプロデューサー、カメラマンをはじめとするスタッフがおり、さらに視聴者に見せる目的があるということも留意しておく必要がある。

2.2. データの作成

録画されたビデオテープをダビングしながら最初からタイマーをつけ、下のようなデータシートに情報を記入していく。一番上のT (time) はインタビューが始まってからの実際の

T	分	
	秒	
①	K	
	P	
	L	
②	K	
	P	
	L	

時間 (real time) を分と秒で記録する欄である。次に大きく上下2段に①と②に分かれているが、ここは2人の対話者を同時に並べて記録する欄である。それぞれK・P・Lとあるが、そこにそれぞれの身振りの様子 (K=kinesic code), パラランゲージの用いられ方 (P=paralinguistic code), それに言語記号 (L=linguistic code) を同時に記録していく。従って、2人の談話行動を交互にではなく、重なっているところもそのままに時間を追って記録することができる。パラランゲージは、トレーガーの提案している記号を用い、カイネシックスはペン (1983) の使用している略号と記号、そして必要に応じて日本語で補足説明をつけた。使用した略号、記号は以下のとおりである。

カイネシックスに関するもの

{ Hd : head, Fa : face, Ey : 視線の方向, ∞ : 下視, ∞ : 上視,
 -∞ : 左視, ∞- : 右視, ∞ : 直視, ∞∞ : 視線合わず, Bd : body,
 BH : 両手, LtH : 左手, RtH : 右手, Bw : bowing (おじぎ),
 Nd : nodding (うなずき), Gr : grin

パラランゲージに関するもの

{ Te : tempo, < : increased, > : decreased, In : intensity,
 ^ ^ : overloud, ↑ : ピッチ上昇, ↓ : ピッチ下降, Ps : pause

3. 結果と分析

本研究で最初に探したのは、英語の談話における言語変種およびそれに関わりのありそうなものであるが、CDを反映する可能性のあるもの、あるいはCDを表わす指標として考えられるものとして次の5種類を挙げてみた。

(1)呼称 (2)主語の省略 (3)短縮形 (4)挿入⁽⁶⁾ (5)空白補充語

以下、ひとつひとつ実際はどうなっていたか考察していくことにする。

変種についての考察

(1) 呼称

呼称がCDに深く関わっているであろうということは、私たちの経験からも明かなようである。親しみを増すために、あるいはその逆の目的のために呼称を一時的に変えたり促したりすることは、よく見られる。次の **Excerpt 1** は、テレビ映画シリーズ『刑事コロンボ (Columbo)』からの一場面である。著名なワイン鑑定家エイドリアン (Adrian) と長年、彼の秘書を務めるカレン (Karen) がコロンボと食事をするために出かける時のものである。エイドリアンは “Mr. Corsini” と彼を呼ぶカレンに対して、11から12行目でファーストネームで呼ぶように促している。秘かに彼を慕っていたカレンは、それを聞き、ためらいながらも嬉しそうに13行目でファーストネームを使っている。

Excerpt 1

Adrian : You know, it's after six thirty, Karen. We have to hurry,
 if we're to meet Lieutenant Columbo. Do you have every-
 thing here or do you have to go back to the house?

- Karen : No, I'm fine, Mr. Corsini.
- 5 A : You know, it's funny. Here we are going out on what can only be described as a date, and you are still calling me Mr. Corsini.
- K : Well, I, I...
- A : No, no, no, no, it's, it's, it's perfectly proper.
- 10 K : Things have always been quite proper between us.
- A : Perhaps, just for tonight, we could suspend the formalities and you may call me Adrian.
- K : Why, thank you, Adrian.
- (Columbo—Any Old Port in a Storm)

これで2人のCDが縮まったことは明らかであろう。

もちろん、促したり促されたりする手続きを踏まないで呼称を変えることもある。Excerpt 2は、映画『ある愛の詩 (Love Story)』からのものである。オリバー (Oliver) は家族の反対にも構わずジェニファー (Jennifer) と結婚したため親子関係を切られていたが、彼女が病気になったため理由を隠して父にお金を借りに来た場面である。

Excerpt 2

- Father : How've you been, Oliver?
- Oliver : Fine, sir.
- F : And how is Jennifer?
- O : She's fine, sir. I need to borrow five thousand dollars for
- 5 a very good reason.
- F : Well?
- O : Sir?
- F : May I know the reason?
- O : I can't tell you. Just lend me the money, please.
- 10 F : But don't they pay you at Jonas and Marsh?
- O : Yes, sir.
- F : And doesn't she teach...
- O : Don't call her 'she.'
- F : Doesn't Jennifer teach...
- 15 O : And let's leave her out of this. Just write out a check, Father.
It's a personal matter. A very important personal matter.
- F : You got some girl in trouble?
- O : Yeah, yeah, that's it. Please lend me the money.
(The father writes out a check and gives it to Oliver.)
- 20 O : Thank you, Father.

(Love Story)

オリバーは、2行目、4行目、7行目、11行目で父に対して“sir”を使っているが、15行目、そして最後の行で“father”と呼びかけが変わっている。最初は縁を切られている気まずさと遠慮からCDは離れていたが、切実さと感謝の表われから“father”を使い、CDが縮んだことが伺われる。すなわち、同一対話者でかつ話題が同じでも、このような短時間のうちにでも呼称が変化することがある。そしてさらにそこにさまざまなパラランゲージやカインシックスが介在して言語変種を強化したり補ったりしているのである。

さて資料となったインタビューでは、K（小松）がY（Yamashita）に対して呼称を使って呼びかけたのは、インタビューの始まりと終わりの2回だけであったが、どちらも“Mr. Yamashita”というようにラストネームにタイトルを付けたものであり、Yもそれをすんなりと受け取っていた。Yのフルネームは、“Dick H. Yamashita”というが、もしYがCDを縮めようと思えば“Call me Dick, please.”というようなことを言うことが期待されるが、ここではフォーマルな会話であり、また初対面に近いらしくYの側でCDを縮めようとはしていない。ファーストネームを使って最初に呼びかける時は、その関係が上位に位置する方が主導権を持つのが普通である。このインタビューでは、Yがゲストであり、KはYの許可がなかったのもそのまま“Mr. Yamashita”という呼称しか使えなかったわけである⁹⁾。なお以下の説明の中で（ ）で示した数字は、ある特定のコードが見られたのは、インタビューが始まってから何分何秒後であったかを実際の時間で示したものである。インタビューの最初の箇所を見ると例1のようになっている。

例1

T.	分	秒	1	22	23	25		
K	K	P	Fa	左へ	Ey ○○ ○○	Bd 少し左へ		
							L	Mr. Yamashita, it's nice to have you in this program.
Y	P							
		L				Thank you for---		

つまり、Kは身体(Bd)を少し左に傾けながら、顔(Fa)を左側(Yの方向)に向け相手を直視(○○)して“Mr. Yamashita”と話しかけている。Yの方もそれに合わせるように顔を右側(Kの方向)に向けて視線を合わせて(◎◎)いる。Kはそのあと“it's nice...”と言いながらおじぎ(Bw)をし、Yもそれに応えてうなずいて(Nd)いる。またYは、“Mr. Yamashita”と“... program.”の最後のところでピッチを上げて(ノ)いる。すなわち、ほんの3秒程の間に以上のことが起こって全体として談話を構成していることになる。フォーマルな会話の出だしの典型とも言えるだろう。

例2は、インタビューの最後の場面であるが、ここでKは2回目の呼びかけを行なっている。(26'5")と(26'7")で視線を合わせ、(26'6")付近では互いに、にこっと笑い(Grin)

例2

T	分秒	26						
		4		5	6		7	9
K	K	Fa 左へ						
	P	Bw	Ey (OO)			(OO)		
	L	Thank you very much, Mr. Yamashita.						
Y	K	Nd	Fa 右へ		Fa 右へ		Fa 右へ	
	P		BH 持上げ胸の前で広げる		BH 持上げ胸の前で広げる		BH 持上げ胸の前で広げる	
	L	And I hope we can help some way through this television.						

合っている。Kは、おじぎをし顔を左に向け続けており、一方Yは顔を右に向けたり両手(BH)を持ち上げ、広げたりしている。CDの観点から見ると、呼称は変わらず、その点ではCDは縮まっていないが、例2では動作が活発になっており、最後に来てCDがやや縮まったと考えられる。つまり、言語上のCD接近の不足を他のコード(今の場合はカイネシックス)が補っていると言える。このようにCDの観点から見ると、P・K・Lは重なり合っており、相補的に働いたりするのである。

(2) 主語の省略

例3⁰⁰は、“Er”という空白補充語が最初にあり、そのあとに“looks like...”と主語の“it”が省略された文が続いている。

例3

T	分秒	9						
		37		42	43		45	
K	K	Fa 左へ						
	P	Fy (OO)	(OO)			(OO)		
	L	Er, looks like the trade gap between U.S. and Japan is, er, now expanding.						
Y	K							
	P	LtH 机の上のレポートに触れる					In A	
	L							

これに対して同じ構文を用いながら、“it”が省略されていないのが例4である。“Er”の代わりに“Now”がその前に来ている点も異なっている。さらに例3では、最初Kの視線は下向き(OO)であるが、(9'42”)で顔を左に向けると同時に視線を合わせており、左手(LtH)も机の上のレポートに触れている。また(9'45”)の“expanding”に強勢が置かれている。それに対して例4では、顔を左に向け、(25'3”)から身体(Bd)を前後にゆすっている。全体的に例4と比べて例3の方がKには動作があり、“er”を使用したりややくだけた感じがする。これは例3は9分台の会話であり、いよいよ話が盛り上がってき

例 4

T	分秒	24 57	59	25 3	4
K	K	Fa 左へ			
	P	Ey ○○ ----- Bd 前傾 Bd 後へ傾ける			
	L	Now, it looks like the U.S. economy is finally entering into a recovery.			
Y	K				
	P				
	L				

たところであり、それに対して例 4 は 24~25 分にかけてのもので、あと 1~2 分で番組が終わるのでその仕度をしているともいうべきで、ややフォーマルに戻っている。以上のことから、CD という点から見ると例 3 の方がその距離において縮まっていると考えられる。このように同一話者が同一インタビューの中で同一構文を使っても状況により、主語が省略されたりされなかったりすることがわかる。

(3) 短縮形

扱った資料は、フォーマルな会話であり、主語と動詞の短縮形を探すのはやや困難であったが、例 5 で Y が “they’ve と “they have” の短縮形を用いていた。

例 5

T	分秒	8 11	12	13	14
K	K				
	P				
	L				
Y	K	Ey ○○ ----- ○○ ○○			
	P	In A ----- Te <-----> Fa 右へ Fa 右へ			
	L	--for those companies who are here, they've made it because of certain criteria--			

テンポ (Te) は、(8'12") から (8'14") にかけて速くなっており、同時に顔を 2 回右に向けて動かしている。視線は下向きが多いが、(8'12") では直視している。短縮形は割合と自然な無頓着 (careless) な時に表われると思われ、それだけ CD が縮まっていると見なすことができそうである。

(4) 挿入

例 6 では、“very good looking cover it has” が主文に挿入され、さらにそれ自身も “has” の目的語である “very good looking cover” が前に出て倒置も起こっている。ある意味で発話が乱れているわけで、それだけ CD の接近を示していると言えそうである。

例6

T	分秒	9	14	19	20
K	K			Fa 左へ	Fa 左へ
	P	Ey レポートを見る	BH レポートを持つ BHレポートを視聴者に見せる		
	L	Te <----->			
Y	K		RtH 右目に軽く触れる	Ey ○○	○
	P	LtH テーブルの上ののせる			BH テーブルの下, LtH 背広の左の前の部分を引っぱる
	L			Gr	Yes.

Kのテンポは速くなり、レポートを視聴者に見せながら顔を左に向け、(9'19")後半から視線を合わせている。なおYは、左手をテーブルの上に載せながら、(9'20")では両手をテーブルの下に持っていき左手で洋服の前の部分を引っぱり姿勢を整えている。これはKの“very good looking cover it has”が誉め言葉なので、それに反応しながら次の自分のターンを取る準備作りと考えられる。また挿入文の前後に空白補充語である“err”, “er”があり、会話が自由に行なわれていることを示し、全体にCDが縮んでいると言えるであろう。

例7

T	分秒	12	41	42	45	50	53	55	56	59	13
K	K										
	P										
	L										
Y	K		Fa 右へ								
	P										
	L	Ps								Ps	...that would lead us to, er, a solution. I think, the, as I mentioned earlier, the gap will
T	分秒	50	53	55	56	59	1				
K	K										
	P										
	L										uh-huh, uh-huh
Y	K										Fa 右へ Ey ○○
	P										
	L	Ps	Ps		Ps						continue, er, unless, er, the American exporters, er, has certain advantages, er, and I'm...

(5) 空白補充語

実際の会話では、いろいろな空白補充語が見られるが⁶⁾、ここでYの発している“er(r)”について考察する。

例7におけるYの発話中(12'41")から(13'1")の約20秒間に5つの“er(r)”が使われている。また、ポーズ(Ps)も多く、Yが一生懸命考えながら話していることがわかる。空白補充語とCDの関係はまだよくわかっていないが、自由に思考をめぐらせているという点では、発話者のリラックスさを示していると言えるだろう。

(6) その他

以上のほかにも、①“should”や“would”など仮定法を使った婉曲表現、②会話の重なり、③互いに言葉をつなぎあつての会話の構築、④相手の言葉の復唱など、CDと関係がありそうなものは考えられる。さらにパラランゲージについても今までの例でも出てきたように、ポーズやテンポ、ピッチ、ストレスあるいは笑い(laughing)などもCDの指標となる可能性があるであろう。

4. 結論とこれからの課題

インターシステムの機能におけるCDの指標となる変種の可能性を示唆したとどまったが、短い談話行動の中にも言語・非言語コードが変化したり、相互に関係し合っていることが観察された。そしてそれらのコードは、時には互いに共起し強め合ったり、またある時は牽制し合うが、その関係はCDという概念を使うことにより、かなりうまく説明できた。これからの課題としては、日本語と英語の変種をいろいろな場面に沿って比較することが考えられ、ひいては異文化間の相互理解の一助になると思われる。これらの研究が可能になったのは、ビデオ機器等の発達に負うところが大きいですが、さらにそれらを利用しパラランゲージやカイネシックスの機能的役割の体系的な研究も大いに必要である。

注

* 本小論は、国際基督教大学に提出した修士論文を少し手直しし、まとめたものである。

(1) コミュニケーション行動を全体的に見れば下のように表される。

		vocal	nonvocal
channel	verbal	speech	writing
	nonverbal	paralinguistic phenomena	kinesics, proxemics

さらに服装、化粧、外来語の使用、コード・スイッチング etc. も実際のコミュニケーションには重要な役割を果たしている。

(2) 談話における「です/ます体」使用変化の研究は、生田(1983)を参照。

(3) これら日本語の変種については、近藤、パン(1984)を参照。

(4) これらの日本語訳はパン(1983)による。詳しい説明もそれを参照のこと。

(5) これらの日本語訳もパン(1983)による。

(6) エックマンは、これを“Bathroom behaviors”と名付けている。鼻をかく、髪をいじるなどであ

- る。
- (7) 1983年6月12日放送されたもの。
- (8) CDを反映すると考え、広義の意味で言語変種と見なした。
- (9) もちろんKは“May I call you, Dick?”というように意向を聞くことはできるが、そこまではしていない。もっと打ち解けていけば、あるいは英語圏出身のインタビュアーならそうしていたかもしれない。またもし勝手に“Dick”と呼びかけても、Yが“Mr. Komatsu”と呼んでくれば、やはり“Dick”はやめて“Mr. Yamashita”と呼び直さなければならぬであろう。
- (10) Yの欄が空白なのは、カメラワーク上Yが撮影されておらず、カインセックスが不明で、また発話もなかったためである。
- (11) たとえば、英語では“well”とか“let's see”がよく使われ、日本語でも「あのう」とか「えー」などがあり、年齢等により使われ方が異なるらしい。

参 考 文 献

- Coulthard, Malcolm 1977 *An Introduction to Discourse Analysis*, London: Longman Group Ltd.
- 江川 清 1978 「談話行動の実験社会言語学研究——目標と資料収集方法について」、『国立国語研究所報告62研究報告集(1)』, pp. 105-16, 東京: 国立国語研究所。
- Ekman, Paul 1979 “Four Types of Facial Expression and Body Movement,” *Hidden Dimensions of Communication* (『ことばの諸相』), pp. 175-200, Fred C. C. Peng (ed.), 広島: 文化評論出版。
- 林 四郎 1973 「表現行動のモデル」、『国語学』92 pp.62-75, 東京: 国語学会。
- 生田少子 1983 “Speech Level Shift and Conversational Strategy in Japanese Discourse,” *Language Sciences*, 5,1.
- Kendon, Adam (ed.) 1981 *Nonverbal Communication, Interaction and Gesture*, The Hague: Mouton Publishers.
- Key, Mary Richie 1975 *Paralanguage and Kinesics (Nonverbal Communication)*, New Jersey: The Scarecrow Press.
- 近藤富英, F. C. C. Peng 1984 「談話に基づく内在的機能としての心的距離の多様性」、『言語のダイナミックス』, pp.37-57, 広島: 文化評論出版社。
- 南不二男 1977 「言語行動と副言語」、『日本語と文化・社会3 ことばと文化』野元菊雄, 野林正路(監) pp.71-100, 東京: 三省堂。
- 南不二男, 江川清他 1979 「談話行動の総合テキストについて」『国立国語研究所報告 65 研究報告集(2)』 pp.77-111, 東京: 国立国語研究所。
- 野元菊雄, 江川 清 1979 「言語行動の分析」、『講座言語3 言語と行動』南不二男(編), pp. 243-70, 東京: 大修館。
- Peng, Fred C. C. 1974 “Communicative Distance,” *Language Sciences*, 31.
1975 「日本人の心的距離」、『言語』4,1, 東京: 大修館。
1983 「連載一言語社会学入門」、『言語』12, 5-12, 東京: 大修館。
- Poyatos, Fernando 1982 “Language and Nonverbal Behavior in the Structure of Social Conversation,” *Language Sciences*, 4,2.
- Trager, George L. 1958 “Paralanguage: A First Approximation,” *Studies in Linguistics* 13, New York University of Buffalo.

Summary

Discourse Analysis : With Emphasis on the Interrelationships of Linguistic, Paralinguistic and Kinesic Codes

Tomihide KONDO

It is well known that language is accompanied by other systems ; human communication is made possible by the interrelations of paralinguage and kinesics with language. And by careful elaboration of utterances, diversities of communication codes are observed in the course of the interaction. Some of these diversities are well explained by the notion of communicative distance which is a personal and psychological distance not necessarily ruled by social status or intimacy between the people engaged in communication.

The purpose of this paper is to analyze actual speech activities from the viewpoint of intersystemic function, so as to delineate the possible determinants of communicative distance and the variables which account for the adjustment and/or maintenance of a given communicative distance.

The data base consists of the transcribed materials of a video-taped television program. Although everyday speech activities would have been most suitable for this kind of research, it is almost impossible to record ordinary speech activities or to video-tape them without being noticed by the persons engaged in them. This being the case, an interview-style program was chosen. The speech activities recorded on the video tape were transcribed on a transcription sheet for the purpose of analyzing the interactions of a dyad along the axis of real time. As for kinesic codes, abbreviated words and symbolic signs were employed along with Japanese words for supplementary explanation. Distinct kinds of paralinguage were picked up and written down according to Trager (1958) together with Japanese words.

It was made clear that human interaction is made possible not only by language but also by the interrelations of paralinguage and kinesics with language. In human communication both linguistic and nonlinguistic codes may change even in such a short conversation as taken up in this paper, and the diversities of the codes are fairly well explained by using the notion of communicative distance. The relations of paralinguage and kinesics to language are various--sometimes complementary, but at other times replacing language.